

# 1. 河川整備計画の目標に関する事項

## 1. 1 流域及び河川の概要

沙流川は、日高山脈に源を發し、ほぼ南西方向に流下している。途中、芽室岳(1,754m)、ルベシベ山(1,740m)、チロロ岳(1,880m)、ピハイロ岳(1,917m)等に源を發するウエンザル川、ペンケヌシ川、パンケヌシ川、千呂露川等と合流し日高町の市街地に至る。さらに戸蔦別岳(1,960m)、幌尻岳(2,052m)に源を發する額平川等の支川と合流し、平取町本町の市街地を経て門別町富川にて太平洋に注いでおり、幹川流路延長は104 km、流域面積は1,350 km<sup>2</sup>の河川である。

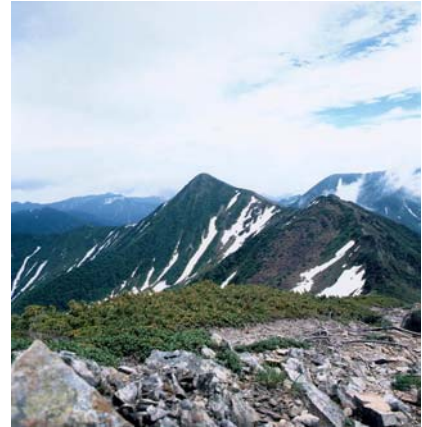


写真 1-1-1 戸蔦別岳

流域は日高支庁の日高町、平取町、門別町の3町にまたがっており、気候は北海道内では比較的温暖で、林産資源などに恵まれ、下流では農耕地として明治初期から拓け水田・牧畜等が営まれ、近年は全国有数の軽種馬の産地として、沿岸漁業とともに日高西部地方の社会経済の基盤を形成している。

流域はその大半を山林が占めていて、その割合は約9割となっている。また、流域内人口は約16,000人である。

沙流川流域は、太平洋側西部の気候区分(表日本型)(出典:新版北海道の気候 気象協会北海道地方本部 1964)に属し、年平均気温は門別(門別町)で7.5℃、内陸に入るに従い標高が高くなるため低下し、日高(日高町)では6.3℃である。

年平均降水量は、門別で1,032 mm、日高で1,426 mmで、日高は台風や低気圧の影響を受け、8、9月には200 mm/月を越える。降雪は日高山間部を除いて少なく、北海道にあつては積雪による支障は比較的少ない。

地形は、東は北海道の背梁をなす日高山脈の2,000m級の山が連なり、北及び西は1,000m級の山で連なった分水嶺を持っている。流域の形状はほぼ南西～北東にのび、流域平均幅は約13kmと細長い形状になっている。最上流部の日高山脈は山腹斜面は急峻で、中流部はおおよそ標高200～400mの範囲にあり、山腹斜面はやや緩やかになるとともに、河岸段丘の発達が顕著である。下流部は、標高100m以下となり、山腹斜面はさらに緩くなると

ともに、河岸段丘もさらに広く発達し、平取本町から下流部には沖積平野の発達もみられる。

沙流川の上流部では、急峻な峰々を連ねた日高山系および輝緑凝灰岩から成る竜門峡のような溪谷と清流から成る景観が連続し、河床は岩盤等で構成されている。

岩知志ダムから二風谷ダムの中流部では、上流部に比べ流れは穏やかで、河岸段丘の発達が顕著であり、河川に沿って農地と国道が連続する。河道は、河床堆積土砂も多くなり瀬や淵がみられるようになる。

二風谷ダムから下流では右岸主体に堤防が続き、周辺では軽種馬や飼育牛の放牧および野菜栽培などが行われ、牧歌的な田園風景が広がり、良好な自然環境とともに魅力あふれる流域景観資源となっている。河道は、河床部が堆積砂礫からなり、瀬と淵が連続する。



写真 1-1-2 日高町  
三岡峡（日高町下流）

流域の植生はその面積の約9割を占める森林植生によって代表されるが、主に平取町市街から上流において森林の割合が高く、それより下流の森林の割合は低く、牧場を含めた農地が広がっている。

森林の分布は気候条件により大きくは温帯、低山帯、亜寒帯、高山帯に区分される。温帯、低山帯植生は標高500m程度までにエゾイタヤ、シナノキ群落が見られ、ハリギリ、ハルニレ等を伴って分布する。亜寒帯及び亜高山帯植生は、この群落の上流で標高1,000m程度までの間にエゾマツ、トドマツ群落、エゾマツ、ダケカンバ群落がアカエゾマツ、ナナカマド、ヤマモミジ、シウリザクラ、ハナヒリノキ等を伴って分布する。このうちエゾマツ、ダケカンバ群落の日勝峠付近は「沙流川源流原始林」として天然記念物に指定されている。この群落の上流は高山帯に移行し、矮小なダケカンバ、ハイマツ等が続く。植林地としては、標高500m以下にカラマツ等を主体とする人工林が分布する。これら森林の林床はササが優占し、標高1,000～2,000mまではクマイザサ、それ以上の標高ではチシマザサが分布する。

流域内の動物は、哺乳類でキタキツネ、タヌキや大型獣のエゾシカ、ヒグマ、重要な種としてクロテンなどが確認される。鳥類はカワセミ、イソシギなどの河川性の種や森林性のクマタカのほか天然記念物のオジロワシ、

オオワシなどの猛禽類も確認される。魚類では上流にはオショロコマ、ヤマメ、中流ではサクラマス、下流ではコイ、ハゼなどが生息し、河口から約5kmの河床が粗砂から細れきのところには、北海道の太平洋岸のみに分布し産卵期にのみ遡上するシシャモの産卵床がある。

河川水の利用については、開拓農民による農業用水の利用に始まり、約2,400haに及ぶ耕地のかんがい<sup>い</sup>に利用されている。水力発電としては、昭和31年に建設された岩知志<sup>いわちし</sup>発電所をはじめとする右左府<sup>うさつ</sup>発電所、二風谷発電所など5カ所の発電所により総最大出力約66,500KWの電力供給が行われている。上水道用水としては、日高町、平取町、門別町に対して供給が行われている。

沙流川では、沿川に住む人々の要望により沙流川橋周辺の河川環境整備事業、二風谷ダム建設に伴う周辺環境整備等が進められ、河川を利用したイベント等が行われている。

流域内には「日高山脈<sup>えりも</sup>襟裳国定公園」、北海道の亜寒帯北部の代表的原生林である「沙流川源流原始林」(国指定天然記念物)があり、豊かな自然環境を有している。

流域には、先史時代から人々が生活の足跡を残し、アイヌ文化の時代にあつては道内で有数のコタン(集落)を形成し、アイヌの人々が先住している。この沙流川流域に住むアイヌの人々をサルンクル<sup>サルンクル</sup>と言ひ、その伝統・文化は今日の流域社会に深く結びついている。チプサンケ(舟おろしの儀式)、口承文芸、アイヌ古式舞踊などが今日まで受け継がれているとともに、アイヌ文化期などの埋蔵文化財がこれまでに随所で発掘されている。平取町においては、このアイヌ文化を後世に伝えるため、その発展と関わりの深い沙流川を中心としたアイヌ文化をさらに振興させる構想を計画している。

沙流川流域の土地利用はその約9割を山地が占める。その残りが耕地や市街地などとなっており、これらの多くは沙流川本川や支川沿いの国道や道道等に沿った平地に広がっている。日高町千栄付近から下流においては、本川と山地の間に耕地と河川・道路が平行する形態となり、日高町市街地で本川・山地間の平地幅は約2,000mと広がる以外は数百メートルから1,000m程度で、河川と道路敷地以外の大部分は耕地として利用されている。平取町本町から下流では、沙流川をはさんだ段丘間の平地幅は約1,500m～2,000m程度と中上流よりやや広くなり、そのうち河川敷地が約500m、残

りの平地で水田や施設栽培が営まれている。また、荷菜付近から下流左岸の段丘上は畑や軽種馬の牧場等に利用されている。門別町富川付近から下流の段丘間の平地は、右岸側に市街地が広がり、左岸は国道橋から河口まで平地がひらけ、国道付近が市街地となり、それより下流の太平洋までは主に牧場として広く利用されている。

沙流川の最上流部に位置する日高町の町勢は、戦後に鉄道や道路の整備等により拡大し、農業と豊かな森林資源を背景に林業や林産加工業等を中心として発展した。近年はこの農林業人口が減少しているが、国道の整備による商店街近代化や豊かな自然環境を生かした観光関連産業に力が注がれている。

平取町、門別町を支える第一次産業の就業者は全就業者の3割を占め、その大半が農業従事者である。作付面積は水稻、牧草が大半を占めるが、近年では水稻にかわりトマト、きゅうり、軟白長ネギなどの割合も増加している。特に平取町におけるトマトの収穫量は、北海道全体の約15%を占めて全道一を誇り、全国的にみても市町村別順位で六位となり、平取町農業の中核を担う作物として、今後も規模拡大を目指している。畜産は日高支庁管内の軽種馬生産が全国生産頭数の約80%を占めるが、その中でも門別町の軽種馬生産は日高支庁管内の約25%を占めている。門別町では、この軽種馬関連産業をまちづくりに生かすべき重要な要素として位置づけている。また、平取町では肉用牛、豚、門別町では乳用牛の生産も多く、これらは地域の特産品にもなっている。



写真 1-1-3  
トマトハウス

沙流川はサケ・マスが遡上するほか、北海道の太平洋沿岸のみに分布する日本固有の魚であるシシャモが秋から冬



写真 1-1-4 平取町荷菜地区、ヌタツプ地区(水田及び施設栽培～トマト等)

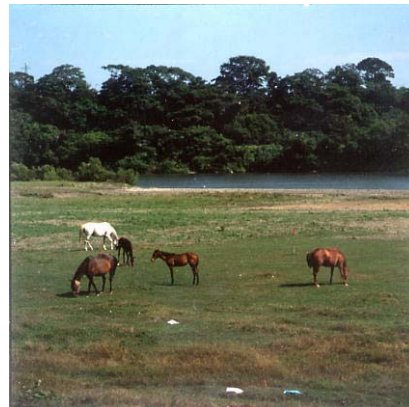


写真 1-1-5 門別町富川の風景(採草, 放牧地)



の産卵期に遡上する。このシシャモは門別町を代表する特産品の一つとなっており、その漁獲量は日高管内の約 60%を占めている。



写真 1-1-6  
シシャモのすだれ干し

沙流川流域内には国道 235 号、237 号、274 号が走っており、道央、道東、道南を結ぶ幹線機能を有している。また、高規格幹線道路日高自動車道が今後流域を横断する計画である。鉄道は苫小牧市～門別町～様似町を結ぶ JR 日高本線がほぼ海岸沿いを走り、幹線である室蘭本線と接続している。

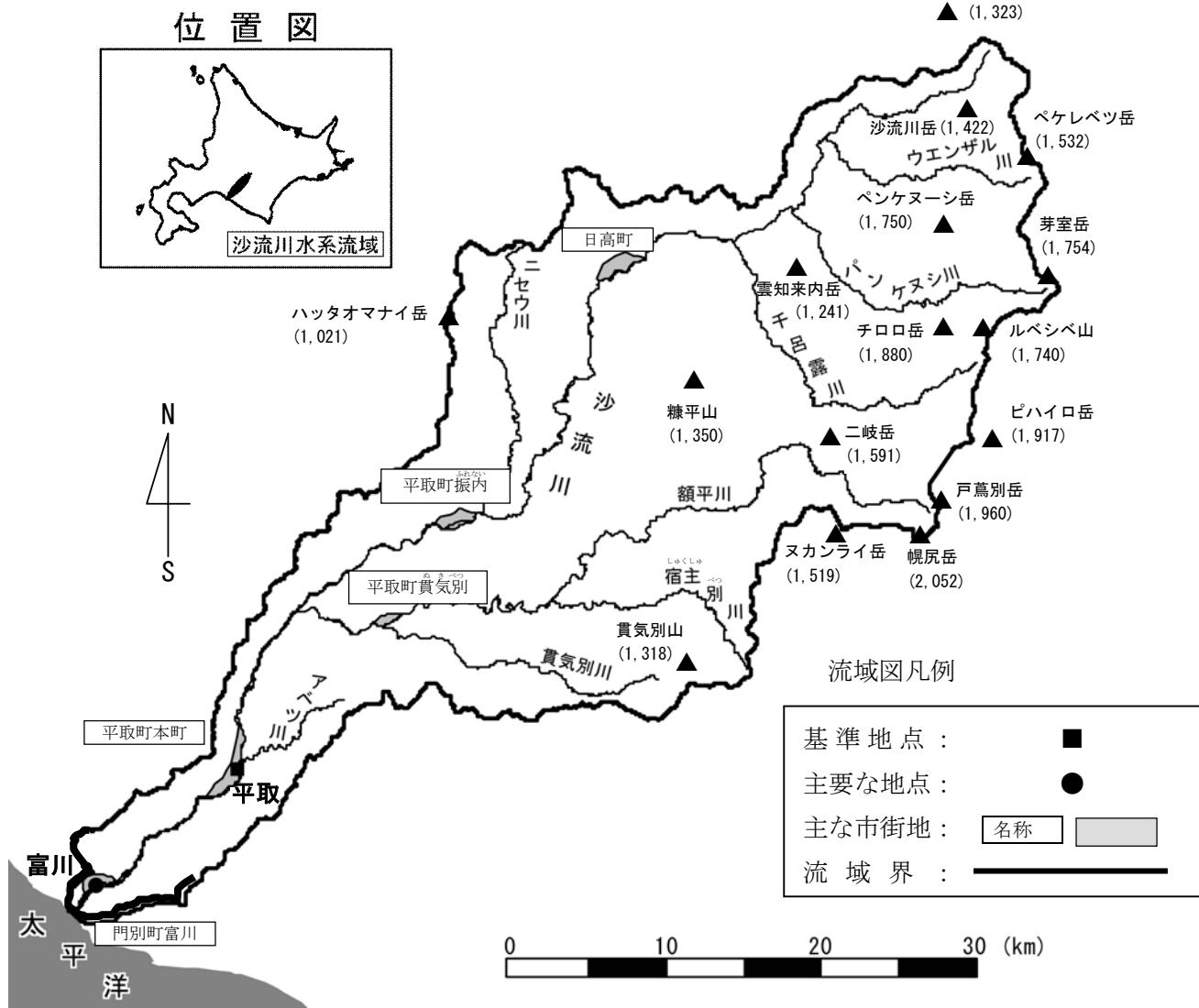


図 1-1-1 沙流川水系 概要図